

手仕事の国、ふくしまの歴史と未来を紡ぐ

福島市民家園を拠点に、高度な技術で日本の近代化を牽引した福島の養蚕と織物文化の伝承活動が続ける「福島市民家園手織りの会」の皆さんにその魅力を伺いました。



福島市民家園手織りの会 会長
鈴木 美佐子さん



歴史に裏付けられた高い技術

「民家園で織り機を動かすと、お年を召した方などは、風景とあいまって『お母さんがやっていた』など、幼い頃の記憶がよみがえるようです」と話すのは、福島市民家園手織りの会（以下、手織りの会）会長の鈴木美佐子さん。「活動をしていると、福島の高い織物の技術や歴史を知り、いつも驚きと発見の連続です」

伝統の手織り復活

銀行の出張所が福島に開設されたのは、福島が当時の日本の重要輸出品だった生糸の集散地であったことと東北の金融の中心だったからです。そのため、盛んに行われていた養蚕業の発展とともに、手織りの技術も発展を遂げてきました。



古い布を裂いて糸にして織る手法。大切な布を最後まで使い尽くそうという知恵から生まれた織物です。手織りの会では、古布を横糸に昔の織機で織っています。



日本三大自然布の一つ「シナ布」。シナの木（科木）の樹皮「科皮」を細く裂いて織ります。福島では「しなだ織り」と言われています。丈夫で特に水に強いことから、ぬれたままの桑の葉を入れる袋（ゆたん）に使われていました。蒸し器の敷布（地方名：アゲノ）にも使われました。



八つ橋織りは、表織子と裏織子の組織を格子状に配した絹織物のこと。大小の正方形や長方形を組み合わせた市松風の四角が丸く見えたりするなど、福島では高度な技術による織物が生産されていました。



弓棚機を使った八つ橋織りの様子

※カケ糸（糸綜統）
横糸を通すために、縦糸を上下に分ける道具



情報を集めていると「母親が弓棚機で織っていた」という、方々がみつかり、その協力を得て当時の作り方でカケ糸を復元することができました。「福島で受け継がれてきた作り方は、目からウロコ、当時の技術の高さを感じました」

弓棚機で織る「八つ橋織り」は糸綜統を8枚使って複雑な模様を作ることが出来ます。矢葺家に四代にわたって受け継がれてきた秘伝書を、手織りの会顧問の佐藤さんが解説して、ついに「八つ橋織り」を復活させることができました。

福島には織物がある

どんどん機械化される社会の中で、なぜ手織りにこだわるのか。そ



研鑽に励む手織りの会の皆さん

矢葺家に代々伝わる秘伝書

これは福島の先人が残した素晴らしい技術と本物の織物を次の世代に伝えて、福島の子どもたちに、自信を持って『福島には織物がある』と言ってもらいたいからです。皆さんも福島市民家園で福島を発展させ支えてきた手織りに触れてみてはいかがでしょうか。

蚕を育て、繭から糸をとり、布を織る。

蚕繭、生糸・真綿、織物と福島には、織物の全ての行程が残っています。養蚕農家だった旧小野家では、古い道具を使って毎年7月から蚕を飼います。8月1日(土)2日(日)に開催される「糸とり・機織り」では、繭を煮て糸を引き出し(座繰り)糸糸をとり、絹機を使って機を織る一連の作業を再現します。(一部体験可)

問/文化課 024-525-3785

福島市民家園 旧小野家での取り組み

